

第37回日本皮膚外科学会総会・ 学術集会を終えて

(2022年9月3・4日)

※ハイブリッド開催

門野 岳史

聖マリアンナ医科大学皮膚科主任教授

はじめに

2022年9月3・4日の2日間にわたり、第37回日本皮膚外科学会総会・学術集会を川崎市産業振興会館でハイブリッド開催いたしました。200名余の皆様にご参加いただき、非常に感謝しています。日本皮膚外科学会はあまり馴染みのない学会かもしれませんが、やや混乱を招きがちですが日本臨床皮膚外科学会とは別組織であり、皮膚外科勉強会をその前身とし、メスをもつ皮膚科医が学ぶ場が必要ということで設立されました。中心となったのが、当時兵庫医科大学皮膚科の宮崎孝夫先生、神戸大学皮膚科の熊野公子先生、清水良輔先生のお三方でした。残念ながら宮崎孝夫先生は本年お亡くなりになられたのですが、先生のご意志は脈々と学会に受け継がれています。

日本皮膚外科学会

日本皮膚外科学会は会員数が700名程度のこじんまりとした学会で、会員間の距離が近いという特徴があります。学術集会は1会場で行いますので、そこに参加者が一堂に会し、質問やディスカッションが盛り上がります。背広とネクタイは基本的になしで、ラフな格好でざっくばらんに議論するスタイルです(図1)。ここ数年COVID-19の影響で現地に集まるのがむずかしい状況でしたが、今回は各日、古参の先生方を中心に参加者の4割程度が会場にお越しになりました。そのため、質疑応答も例年に近いくらいまで盛り上がりました。この学会は基本好きなだけ質疑応答が行われるためプログ



図1 会長もクールビズ

ラムが遅延することが多く、予定より1時間くらい伸びることが通常運転です。案の定、順調にプログラムの消化が遅れていきましたが、許容範囲内になんとか収まりました。

Hafner 先生の特別講演

今回は、特別講演としてZurich大学のHafner先生をお招きし、非メラノーマ皮膚癌の治療や再建に関して貴重なお話をいただきました。従来、海外の先生をお呼びするのは費用面も含めてハードルが高いのが難点でした。COVID-19は学会運営に

多大な悪影響を及ぼしますが、あえてよい面をあげるとすると、Web講演の普及に伴い、時差を配慮する必要こそあれ、海外の先生のご講演をお願いしやすくなったことです。日本皮膚外科学会はややdomesticな性格をもつ学会ですが、今回スイスにおける皮膚外科の第一人者のご講演を拝聴し、当地の事情を感じとれたのは非常に有益でした。

学会準備

準備にあたっては、学会を主催された他の先生方と同じく、開催形態をどうするかで気を揉みました。話が少し逸れますが、今年は日本褥瘡学会関東甲信越地方会学術集会という別の学会を4月に主催しました。本来2021年7月に行うはずだったのですが、COVID-19の影響や東京オリンピックと重なったことにより、2022年の4月に延期したものの、ご承知の通りCOVID-19は2022年になっても収まらず、結局Webのみの開催に追い込まれました。第37回日本皮膚外科学会についても、収支予算書とにらめっこしながら、開催形態をどうするか悩みました。会場でのディスカッションに重きを置く学会ですので、現地開催が望ましく、また会員の利便性も考慮し、最終的にはハイブリッド開催に決めさせていただきました。懇親会の類も……とは思ったのですが、力及ばず、アフターは参加者の皆様の自主性にお任せとしました。

コロナ禍においての学会

コロナ禍においての学会の辛さとして、例年通りにはいかない、楽観的な予想を裏切りいつまでも感染が収まらない、ハイブリッドだとコストが馬鹿



図2 学会が終わってやれやれ。教室員とともに

にならないなどがあげられます。サポートしてくださる企業側にとっても、参加者数が読みにくい、COVID-19やロシアのウクライナ侵攻により、日本さらには世界全体が景気後退局面にあるといった悪条件があり、事情が厳しいことも理解できます。今回はなんとか目標程度の協賛をいただくことができましたが、2020年や2021年に学会を主催された先生はいかほど大変であったかと思います。何事も身をもって体験しないと実際のことはわからないものです。

おわりに

収支決算はこれからですが、兎にも角にも学会は終わりました。閉会式の挨拶が終わったときはやれやれという安堵感と、文化祭などが終わったときに感じる寂寥感が混ざった気分でした。今回の開催にあたっては、教室のメンバー(図2)、学会の役員や参加者、賛助いただいた企業の皆様に多大なご助力を仰ぎました。ここに深く感謝の意を表したいと思います。その中でも、実際問題として一番頼りになったのは運営事務局であり、私1人では手も足も出ませんでした。学会をやるのはもうたくさんと思わなくもないですが、そうもいかなさそうですので、また前を向いて進んでいきたいと思っています。